

ἡμέρα τοῦ κυρίου

ヘーメラ トゥー キュリウー

知っておきたいキリスト教のことば (98)

主の日 しゅのひ

旧約聖書における「主の日」は、イスラエルの民にとって記念する日という意味をもっていました。イスラエルの預言者がこの言葉を用いて語るとき、この主の日は神さまが世界に裁きを下す日だという意味で使われていました。その裁きによって、イスラエルの敵は滅亡していくのだということも、あわせて預言されていきます。つまり主の日とは、イスラエルにとって救いが与えられるという希望の日でした。

しかし洗礼者ヨハネは、主の日には異邦人だけが裁かれるのではなく、ユダヤ人や宗教指導者も裁かれるのだと説きます。だからその前に神さまの前に悔い改めるようにと、宣べ伝えるのです。そしてイエス様も、洗礼者ヨハネと同様に悔い改めを宣べ伝えていきます。

さらに新約聖書の時代になると、「主の日」はこの世の終わり、そしてキリストの再臨のときとして理解されていきます。終末に起きるとされる神さまの審判のときであり、神さまの支配が完成されるときだと考えられていくのです。

また「主の日」には、もう一つの意味があります。それは「週のはじめの日」という意味です。イエス様は週のはじめの日に復活されました。初期キリスト教では週のはじめの日である日曜日と、ユダヤ教で守っていた安息日である土曜日を大切にしていました。しかしユダヤ教からの脱却を目指した 70 年以降は、イエス様の復活を記念する日曜日だけを守るようになります。

わたしたちは現在日曜日を、安息日にかわるキリスト教会独自の聖なる日として大事にしています。日曜礼拝を「主日礼拝」と呼ぶように、主の日を神さまにお祈りをささげ、感謝と賛美を共にする日として大切に守っていきたいと思います。

今回は「しゅろの葉」です。お楽しみに。



「新しいエルサレムをヨハネに見せる天使」
ギュスターヴ・ドレ

(1832~1883年)

見よ、わたしは 大いなる恐るべき主
の日が来る前に 預言者エリヤをあなた
たちに遣わす。

(マラキ書 3 章 23 節)

